門司港レトロ事業の変遷と将来の可能性

―コロナ後の展望―

氏　　名　　磯部　光和
指導教員　　城戸　宏史

要旨

関門海峡に面する門司は、明治時代になると石炭の需要が増加したため、現在の鹿児島本線が 1891 年に門司駅（現門司港駅）まで開通したことで、石炭の積出港として急激な発展を遂げた。

鉄道と港湾の街として門司は繁栄していき、昭和初期には横浜・神戸に次ぐ港湾都市になったが、船の大型化や機械化、国鉄の分割民営化等によって門司港は衰退していった。門司港駅周辺には歴史的建造物が多数残り、半ば打ち捨てられた状況で、建物の保存が問題となっていた。こうした状況下に、歴史的建造物の保存と活用を目指して門司港レトロ事業が始まった。

しかし、門司港レトロ事業が始まって 30 年近くが過ぎ、各施設のリニューアルが必要となっていた最中に、コロナ禍によって観光地として大きな打撃を受けた。門司港レトロの経緯を顧み、現状を分析し、観光地としての魅力を増して、観光客を増やす戦略を考えてみた。

まず、小樽、松島、宮島、大宰府という門司港レトロと地理的関係が似ている観光地を選び出した。これは、観光客の動きをもとに観光地を比較・分析するのが現状に即していると考えた結果である。問題点として現れたのは観光の核となる場所を欠いていること、名物料理が焼カレーに限られることなどであった。一方の強みとしては、イベントが盛んに開催されて、多数の観光客を集めていることであった。コロナ発生前の 2019 年の年間のイベントを検証して門司港レトロで開催されるイベントを分析すると、定期的に行われるイベントが多いこと、歴史的建造物が会場として利用されていること、関門海峡花火大会の存在の大きさなどが特徴的であった。

ＳＷＯＴ分析等を試みて、長所を活かし、短所を補う方策を考えて、門司港レトロの発展のために３つの提言としてまとめた。すなわち、門司港に観光のメインスポットが存在しないという課題に対して、

提言１　　「インスタ映えする写真スポットの発掘」。

次に、休日の観光客の集客を目指して、

提言２　　「子ども向けのイベントとマルシェ等をひとつのイベントに集約して、家族全員で楽しめるイベントとして開催する」。

最後に、平日の観光客の集客のために、

提言３　「用件が終わって時間が空いた出張者に、現実から離れた場所で安らぎを味わってもらう」観光地を目指す。

以上の３つの提言をもって、この論文の結論としたい。